考古アラカルト 93

木村捷三郎氏収集資料の紹介

－青銅鏡・風鐸片・壷状製品－

http://www.kyoto-arc.or.jp
（公財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

写真１　青銅鏡

写真２　銘文

木村コレクションとは　京都市埋蔵文化財研究所理事であった木村捷三郎（きむらしょうざぶろう）先生（1905 ～ 1994）が生涯にわたり収集された資料です。先生の没後、貴重な収集資料は整理され『木村捷三郎収集瓦図録』（1996 年）として刊行されました。このとき整理対象とされたのは瓦類が中心でした。これは、木村先生が古瓦の研究に生涯を捧げてこられたからです。

木村先生が収集された資料は 203 箱で、大切に保管されています。資料の中心は瓦類ですが、土器類や陶磁器類、石製品、金属製品も含まれています。金属製品には興味深いものがあるため、紹介します。

青銅鏡（写真１）　京都市東山区今熊野泉山にあった亀塚経塚で採集したとされる青銅鏡です。直径 9.65 ㎝、縁の厚みは 0.8 ㎝あります。中心の鈕（ちゅう）（つまみ）、鶴と笠松文・二重圏線からなる文様帯、垂直に立ち上がる縁からなります。鈕は直径 2.2 ㎝、孔は上下方向に開いています。錆により文様は不鮮明ですが、同じ文様をもつ名古屋市熱田神宮伝来の蓬莱（ほうらい）鏡を参照すると、亀甲文様が施され、左側に頭部、上下方向に短い手足、右方向にしっぽがあることから、亀が表現されたことがわかります。

文様帯は、左下に２羽の鶴、上半に笠松文、下半に珠文や花文が配置されます。右側の鶴は首を伸ばし、左側の鶴は羽根を広げ、今にも飛び立ちそうです。

上半から右側の文様は一見、魚か海獣が寝そべったように見えますが、熱田神宮例では松枝が横に広がった笠松文が３～４段配置されています。文様の外側に二重の圏線（けんせん）がめぐり、圏線と重なって笠松文が表現されることから、圏線は最後の段階で鋳型に彫られたことがわかります。写真右下の圏線外側には４文字程度の銘文がありますが判読できません（写真 2）。

鶴・亀はいずれも長生きする生物であり、松は常緑樹で１年中青い

写真３　風鐸片

写真４　仁和寺五重塔風鐸

表

裏

写真５　壷状製品の破片

ため、不老長寿を象徴するめでたい内容の銅鏡であったといえます。

亀塚経塚（本多山経塚）『木村捷三郎収集瓦図録』では収集された鐙瓦（軒丸瓦）の紹介として、34 頁に「泉涌寺の南方、本多山と称される小丘上の北斜面に位置する。平安時代後期に営まれた瓦経経塚」「亀塚とは丘陵地の形状から名付けられたといわれ、また本多山と呼ばれるのは山頂に江戸時代初期の大名本多正重一族の墓碑がある」「昭和 11 年７月 15 日に現地を踏査し、瓦経片を採集している。採集地点は不明である。」と解説されています。銅鏡の記載はありませんが経塚に納められていたのでしょうか。

風鐸片（写真３）　仁和寺で採集された、風鐸下端の切れ込み部分の破片です。風鐸は、仏堂や塔の軒の四隅などに吊り下げてある青銅製鐘形の風鈴です。写真４から、切れ込みは４箇所あったとみられます。横 11.7 ㎝、縦 7.0 ㎝、厚さ 0.4 ㎝、下端には幅 1.35 ㎝、厚さ 0.6 ㎝のふくらみが巡ります。

表・裏面とも平滑に仕上げられており、裏面は上から約２㎝の範囲に黒い斑点が付着し、風招が当たった痕とみられます。

表面には３行以上の銘文があり、風鐸が完成した後、タガネで文字を打ち込んだようです。一行目の「覚」は「正覚」、つまり佛の正しい悟り、二行目は「□為佛果」とあり、仏道を修行し成仏を得たという内容とみられます。三行目「□川渚（猪か）次良」はこの風鐸を寄進した人物の名前とみられます。三行目下が切り込みの中央に当たるため、左半分にも文字列が入るスペースがありますが、人名は最終行とみられるため、空白であったと思われます。

壷状製品（写真５）　製品の種類は不明ですが、反り具合からみて壷状の製品の体部片と推定されます。写真の向きが正しいとすると、横方向 13.7 ㎝、縦方向 10.3 ㎝、破片の厚さは 0.35 ～ 0.6 ㎝です。復元径は、約 24 ㎝です。

裏面には「長法寺山中」、左に「かねつき」の墨書があります。先生のメモ用紙には、「旧長法寺　俗称　カネツキ」と記されています。遺物袋にも「南山城」の書き込みがあり、いずれも採集地点を示す情報といえます。南山城ではカネツキは綴喜郡井手町多賀金付、京田辺市松井金付田、相楽郡精華町下狛鐘付田で確認できますが、いずれも低地で、「長法寺山中」とは一致しません。採集地点については、今後の調査で明らかとなることを期待します。

（丸川義広）